

2018. 11. 25

聖書：サムエル記下12章1-15節

『神に対する罪』

ダビデはウリヤという部下の妻バト・シェバと姦通し、夫であるウリヤを戦場に送り、殺してしまいました。しかも、その後バト・シェバを自分の妻に迎え入れ、誰にも謝罪することなく、罪を認めることなく、王として過ごしていきました。

ナタンという預言者がいました。彼は一介の預言者というのではなく、おそらくは王宮に直接仕える預言者の一人でありました。

ナタンはダビデに一つの話語り始めました。その話は短くわかりやすい話でした。二人の男がいた。一人は豊かで、もう一人は貧しかった。豊かな男はたくさん家畜を持っていた。ところが貧しい男はたった一匹の雌の子羊を持っているだけだった。けれど彼はその一匹の子羊を養い慈しみ、家族と共に家族のように育て、子羊は彼のお皿から食べ、彼のカップから飲み、彼とともに眠り、まるで娘のようにして育てていった。ところが、ある日豊かな男は、自分のところに来た客をもてなすのに、自分の家畜を殺すのを惜しみ、よりによって貧しい男のたった一匹の子羊を盗み出し、その子羊を客にふるまった、という話でした。

ナタンの話は唐突な話でしたが、ダビデはこの話に引き込まれ、貧しい男の子羊を盗み、殺した豊かな男に対して激怒しました。「神は生きておられる、そんなことをした男は死罪だ」と言い、「子羊の償いに四倍の値を払うべきだ、憐みのところを持たなかったからだ」と言い切ったのです。

するとナタンはダビデに向かって「その男はあなただ」とはっきりと言ったのです。ダビデはナタンの言葉を聞いた時、何の話だ、と思ったのではないのでしょうか。ナタンの話す話、そこには死罪にあたる人間が出てくる。けしからん。それが自分のことを言われているなどと、夢にも思わない。ダビデは力強く、そんな男は死罪だ、と言ったのです。ナタンはそのダビデを見据え、指をさすようにして、それこそあなたではないか、と言い切ったのです。

わたしたちは人の悪いところなら、いくらでも言うことができる。あの人のあいうところがダメだ、とか、そこはちょっと問題だ、そういうことを言うこと

は難しいことではないし、時には的を得ていることもあるでしょう。人の欠点ははっきり見えるのです。

しかしその悪いところそれはあなたそのものだ、と逆に言われたら、どうでしょうか。自分した悪、それを人は感じていても、認めることはとても難しいことです。

ダビデはウリヤが死んでのち、バト・シェバを妻とし、誰にも謝罪することのない生活を続けていました。つまり罪を重ねていた。

なぜダビデは自分の非を認め、謝罪しなかったのでしょうか。ウリヤは死んでしまっていないのです。それならせめてバト・シェバに謝罪し、本当のことを伝える必要があったのではないか。ダビデは王であり、たとえその事実を知る人がいても、咎める人がいなかった、ということが一つの理由でしょう。黙っていればわからない、そう思っていたのかもしれない。しかし、それだけではないはずで、ダビデがナタンの話を聞いて、そんな悪いことをする奴は死罪だ、と言ったことはダビデの中に、はっきりと倫理観もあり、律法のことまでわきまえていた、ということがわかるのです。つまりすべてわかっていた。わかっていたのに、自分のしたことの悪を、非を認めない。どうしてなのか。

人間は自分もよくわからない深いところで、自分が悪い人間だ、ということを受けたくはないのではないのでしょうか。口ではわたしは悪い奴で、などといっている人でも、その人の深い部分、地下2階の部分では悪い奴であることなど了解したくない。もしそれを認めたら、自分の存在が根本から否定されて、立つ瀬がなくなる、生きていく元気も勇気もなくなってしまうからでしょう。ましてここでダビデのしたことは姦通と殺人です。そして他人事としてはすぐさま死罪だ、とダビデ自身自分の口からいうような重い罪なのです。それを認めることは自分の存在を全否定しなければならなくなる。そうこうしているうちに時間はどんどん流れていく。

ナタンはその男はあなただ、と言った後、すぐに主はこういわれると言って、主の言葉を伝えます。神がナタンを通してダビデに語りかける。ダビデはここで、罪を犯してからはじめて神の言葉を聞くのです。神はここでダビデに対して、神がダビデを選んだことを語り、必要なものはみな与えてきたことを語り、なぜそれにも拘らずダビデは神の意に背くことをしたのかと語り、バト・シェバを奪

い、ウリヤを殺したのはあなただ、と明言される。そしてビデに対する罰が語られる。

神は事の真相をすべてご存知、というだけでなく、これまでのダビデと神との関係を語って、なぜ、神の目に悪と映ることをしたのか、と言われた。それはもう少し別の言い方をすると、なぜ神との関係の中で行動しなかったのか、神との関係ぬきに、事を進めたのか、ということでもあります。ダビデは今回のこの出来事の間、すっぽりと神との関係が抜け落ちている、その時この罪が起こっていく。

ダビデはこのとき自分に向けて語られた神の言葉に聞いて何を思い、何を考えたのか。ここまで自分の罪を認めず、バト・シェバを妻に迎え、何もなかったかのように王としての生活をしてきたダビデ。自分が罪人であることを認めること、それは自分を全否定することであると感じて、無視してきたダビデ。しかしダビデは混乱する思いの中で、神がすべてを知っておられる、ということはすぐに分かったでしょう。どんなに人はごまかすことができても、神はわたしの罪の事実を知り、わたしという人間を知っておられる、ということはナタンの言葉を通して、思い知らされた。

と同時に、自分が罪人だ、という宣告をここで受けたのです。自分という人間の根幹を震えさせる宣告です。先ほどから言うように、自分が罪人であることを認めれば、自分が死罪にあたる人間であり、全否定するより仕方ない人間であること認めることになるからです。だがダビデは、その神の言葉を受け入れられます。自分が罪人であることを神の御前で認めるのです。

どうしてダビデはその神の言葉を受けとめたのか。預言者ナタンをも殺して、すべてを闇の中に葬ることも、王であるダビデはできたはずですが。実際、バト・シェバとの姦通も、ウリヤを合法的に殺すことで、闇に葬ってきたのです。

しかしダビデはここでナタンを殺すのではなく、ナタンを通して語られる神の言葉を聞いている。そのわけを今論理的な説明として語ることはできません。ここには、神の言葉の前で観念したダビデがいます。どんなに逃げ回っても、この方の前から逃げ遂せるものではない、この方の前ではじたばたしてもしょうがない、というものもあったでしょう。しかし、根本にはこの方の言葉の前で、「はい、そうです」と応答している自分がいた、ということでしょう。神の権威にひれ伏した、ということです。

罪を犯した人は、理屈をこねたり、事情や環境が悪かったのだ、という罪を犯したことを何かのせいにしようとする人もいるでしょう。中には神まで持ち出してきて、神が自分に自由を与えたことが悪いんだ、という人だっているでしょう。だがダビデは、ここで自分の殺人を誰かのせいにも、環境のせいにも、事情のせいにもしていない。ただ自分は「主の前に罪を犯しました」と告白、懺悔したのです。

詩編5 1篇はこの時のダビデ自身の思いをうたった詩であります。詩編の中でも、ダビデの詩としてもあまりにも有名な詩であります。ダビデはこの詩において、混乱する状態の中で、これまで自分の中に抑え込んできた自分のあやまちを、神のみ前でそれが罪であったことを自覚し、それを言葉に出して語り、神の目に悪と映ることをしたことを自分の口で語り、なお神が罰を与えつつも自分を赦しの中においてくださり、自分のうちに新しい霊を授け、清い心を創造してください、と祈るのです。そして罪を犯した相手への償いの道を探り、それを果たさせてくださいと祈るのです。

詩編5 1篇はダビデの壮絶なドラマを内に含む祈りと言える一篇です。ダビデは語られた神の言葉を拒絶することなく、聞き、そこで自分が罪人であることを認め、その罰を受けとめ、罪の告白を神の御前でなし、尚罪の赦しを与えてくださる神の恵みを聞き取ったのです。ダビデに今後与えられていく罰をどうとらえるか、いろいろな受け取り方があるでしょうが、つきつめて言えばそれは神のご判断です。ダビデはただそれを受け取る。そして罪人である自分が神の赦しの中で歩む、という歩みあらためて、一から歩みだしていくのです。

ダビデは自分の罪を神の言葉によって自覚した。わたしたちは、罪の自覚をキリストの十字架において自覚する。キリストを十字架にかけて殺すほどの罪を自分はおかしている、ということに気づかされて罪を自覚していく。ダビデは十字架を知らないけれど、まちがいなく神の言葉によって罪の自覚を与えられ、新しいのちへと導かれていく。ダビデのドラマは他人事ではない。わたし自身のドラマとも重なっていくのだ、ということ信仰において知らされていきたいと思えます。